

ブルーノ・タウト設計の ベルリン市ノイ・ケルン地区の集合住宅

田中 辰明

柚本 玲

お茶の水女子大学 名誉教授(生活環境教育研究センター) お茶の水女子大学 田中辰明研究室

はじめに

旧西ベルリンの一番東にノイ・ケルン(Neu Kölln)という地区がある。その更に北にはミッテ(Mitte)と呼ばれるベルリンの中心部がある。ミッテ地区は旧東ベルリンであった。ノイ・ケルンは旧西ベルリンでベルリンの中心部に近く、早くから発達した地区である。すなわちノイ・ケルンはベルリンの壁に接していたのである。ノイ・ケルンは下町の風情があり、本誌で紹介したオンケル・トムズ・ヒュッテあたりの住宅街とは趣を異にする。旧西ベルリンの東の端ということで、多くの外国人労働者も居住するようになった。この地区にブルーノ・タウトは3つの集合住宅団地を残している。いずれも1920年代の作品である。本稿の建築物については、URL:<http://tana.katatsuaki.seesaa.net/>でカラーでご確認いただける。ご興味のある方は、合わせてご覧いただきたい。

1. ヴァイガンドウファーの集合住宅

この集合住宅は1925年～1926年に建設された。ヴァイガンドウファー(Weigandufer)に面してまたこの道路と直交するヴィルデンプルッフ通り(Wildenbruchstrasse)に90度曲げて建設された。平面的に見ると大工が使用する曲尺の形をしている。ウーファー(Ufer)とはドイツ語で運河を意味する。この住宅はノイ・ケルン地区を流れる運河に沿って建設されている。ベルリンにはシュプレー河(Spree)という河が流れ込み、市内ではそれが細かく分かれて流れている。一部では川幅が1kmを超える場所もある。このような運河を使って船舶による運搬が行われ、ベルリンが早くから工業都市として発展することが出来たのである。平地を流れる河なので、日本の河川と異なり、流れも緩やかである。

この集合住宅の所有者はベルリン市の住宅供給公社

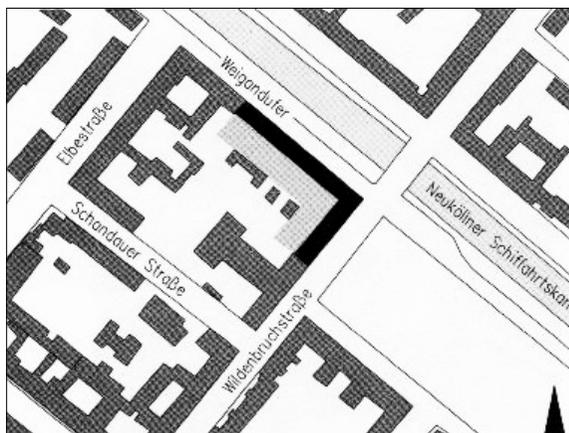


図1 ヴァイガンドウファーの集合住宅の敷地配置図



写真1 ヴァイガンドウファーの集合住宅、5階建て集合住宅の外観

ゲハーグ(GEHAG: Gemeinnützige Heimstätten Aktiengesellschaft)建設者も同様にゲハーグである。住戸数は丁度100戸である。戦災で損傷した部分が1952年～1953年にかけて再建されている。単に船も航行する運河に沿って住宅を細長く建設したのでは単調になる為に、タウトは平面的に見て曲尺型(もしくはL字型)に建設し、建物にアクセントを与えた。敷地配置図を図1に示す¹⁾。写真1にこの集合住宅の外観を示す。写真の通り、5階建てである。写真2にヴァイガンドウファーとヴィルデンプルッフ通りの交差点から写した写真を示



写真2 ヴァイガンドウファー集合住宅の隅角部分



写真3 ヴァイガンドウファー側からの集合住宅外観



写真4 ヴァイガンドウファーに面する集合住宅外壁の玄関

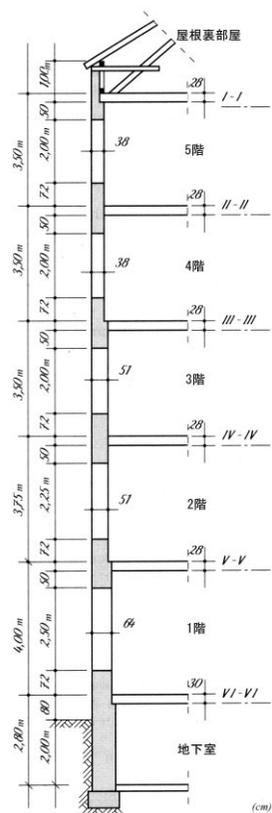


図2 1910年代5階建て集合住宅の標準断面図

す。写真3にヴァイガンドウファー側からの外観を示す。写真4にヴァイガンドウファーに面する外壁の玄関を示す。

さらに同年代である1910年代の5階建て集合住宅標準断面図を図2に示す²⁾。この図から1階の階高は4m、2階は3.75m、3階から5階は3.5mが標準であったことが分かる。日本の集合住宅では階高は評価の対象とならず、販売用パンフレットにも記載されていない場合が殆どで、建築基準法の許す範囲でできるだけ低く抑えられているのが通常である。日本に比べ高い階高が用いられてきたのも、ドイツの集合住宅が簡単には壊されずに補修を続ける事で永く住み続けられている理由の一つである。この図から1階の壁厚は64cm、2階と3

階は51cm、4階、5階は38cmと、日本建築に比べ非常に厚いことが分かる。壁自体に熱容量を持たせ、一度暖房をすると容易には冷めないような工夫がなされていた。床厚も1階が30cm、2階から5階は28cmと厚く、子供が少々飛び跳ねても騒音が下の階に影響しないような配慮がなされていた。騒音が元で、上下階の住人の仲が険悪になる、母親が育児ノイローゼになるという問題は少なかった。このような配慮がないと人々は安心して集合住宅に長期にわたり居住する事ができないのである。

2. ライネ通りの集合住宅

この集合住宅は1925年～1928年に建設された。1期工事は1925年～1926年、2期工事は1927～1928年に行われた。191戸の住宅があり、所有はベルリン市とベルリン州の住宅建設公社 (Stadt und Wohnbauten Gesellschaft mbH) で全住居戸数は188戸である。建設者は東ベルリン共同建設会社 (Gemeinnützige Baugesellschaft Berlin-Ost mbH) である。この集合住宅群はライネ通り (Leinestrasse)、オーデル通り (Oderstarasse)、オーカー通り (Okerstrasse)、リヒテンラダー通り (Lichtenraderstrasse) の4つの道路に囲まれた矩形の土地に“口”の字型に建設されている。この付近の区画整理は1980年に計画され、1905年から1914年にかけて実施された。区画整理された道路の区画に収まるようにこの集合住宅は建設された。ワイマール共和国時代の典型的な都市内勤労者用集合住宅といえる。タウトはこの集合住宅で集合住宅建設の形態と秩序を完成させたとも言われている。1951年に戦災で破壊された部分が再建され、1966年に改修が行われた。この集合住宅はベルリン市内のテ

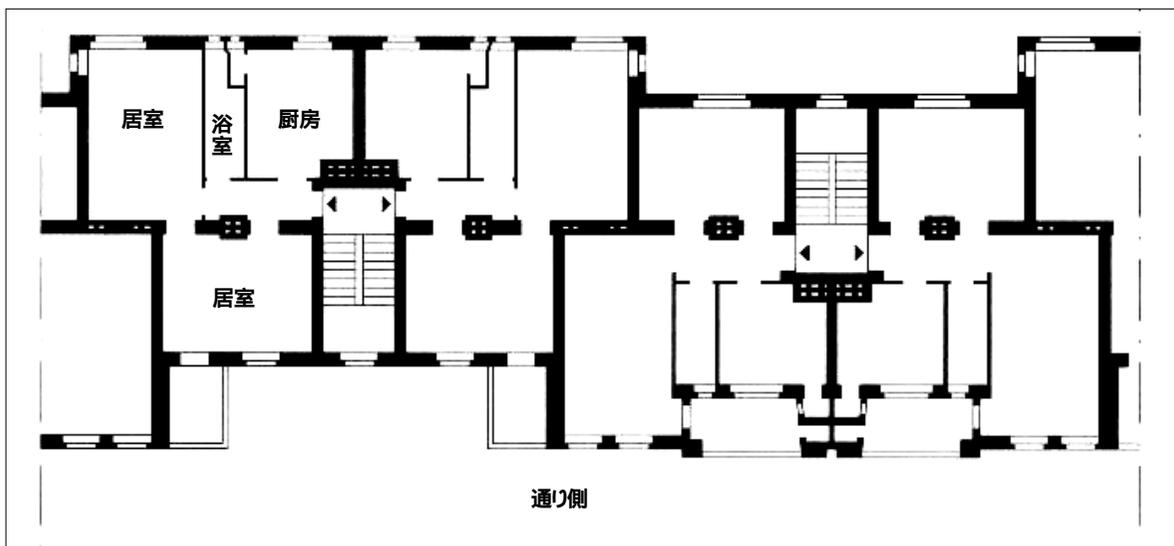


図4 ライネ通りの集合住宅の平面図(2室型)

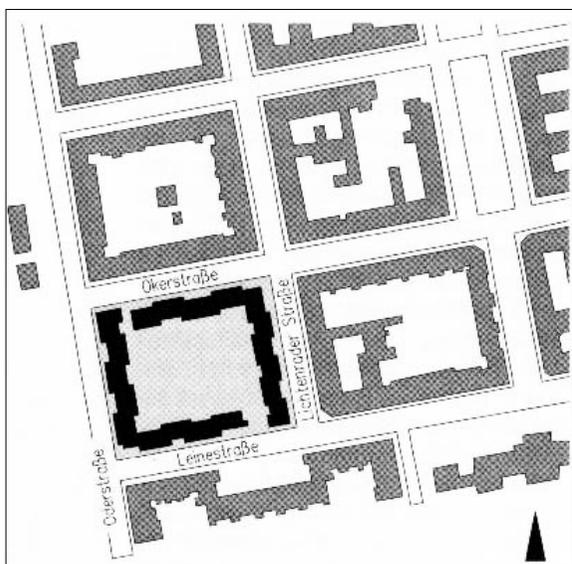


図3 ライネ通りの集合住宅の敷地配置図

ンベルホーフ飛行場(Flughafen Tempelhof)に隣接して建設された。テンベルホーフ飛行場は旧西ベルリンの中央部にある飛行場で、ヒットラー政権の際に建設された。西ベルリンがソ連により封鎖された際に西側連合国が空輸作戦で物資を送り込んだのもこの飛行場である。しかし市内にあることから騒音問題で夜間の離着陸ができず、2008年に惜しまれつつ閉鎖されてしまった。この集合住宅の敷地配置図を図3に示す¹⁾。2室型の住宅が多く、この平面図を図4に示す¹⁾。この平面図が示すように道路側と中庭側に交互に窪み部分を作り、建物にアクセント

を与えている。写真5にこの集合住宅の外観を示す。写真6にこの集合住宅の玄関とその上にある階段室の外観を示す。写真7はこの集合住宅の中庭側から撮影したものである。ドイツの集合住宅の中庭では多くの場合芝生が植えられ、ここでもドイツ人が好む樅の木が植えられ成長している。樅の木をドイツ語でタンネ(Tanne)と言う。ドイツ人の好む歌で特にクリスマスが来ると歌われるのが「 O Tannebaum , O Tannebaum , wie true sind deine Blätter! 」である。「モミの木よ、モミの木よ、(冬にも) 緑を保つお前の葉は何と誠実な事か! 」という歌であるが、わが国でも「モミの木、モミの木…」と訳されて歌われている。

写真8は中庭に立つ子供の遊び場の使用に関する注意を記した看板であるが、ドイツ語とトルコ語で書かれている。事実このノイ・ケルン地区、並びにクロイツベルク地区はトルコ人の労働者が多く住み着いている。ドイツ語とトルコ語で書かれた看板は後述するオッサー通りの集合住宅でも見ることが出来た。写真9にこの住宅のテラスを示す。ベルリンのような寒地では建物の外に飛び出したバルコニーよりも建物内に設けたテラスの方が多い。このテラスにも植物が植えられ、風車や人形が置かれている。このような勤労者住宅においても人々はロマンティックに生活をしている事が伺われる。写真10に建物内の階段を示す。集合住宅に多い単調な垂直階段ではなく、ゆるやかな曲がり階段となっている。この住宅の外部には集合住宅がブルーノ・タウトにより設計され

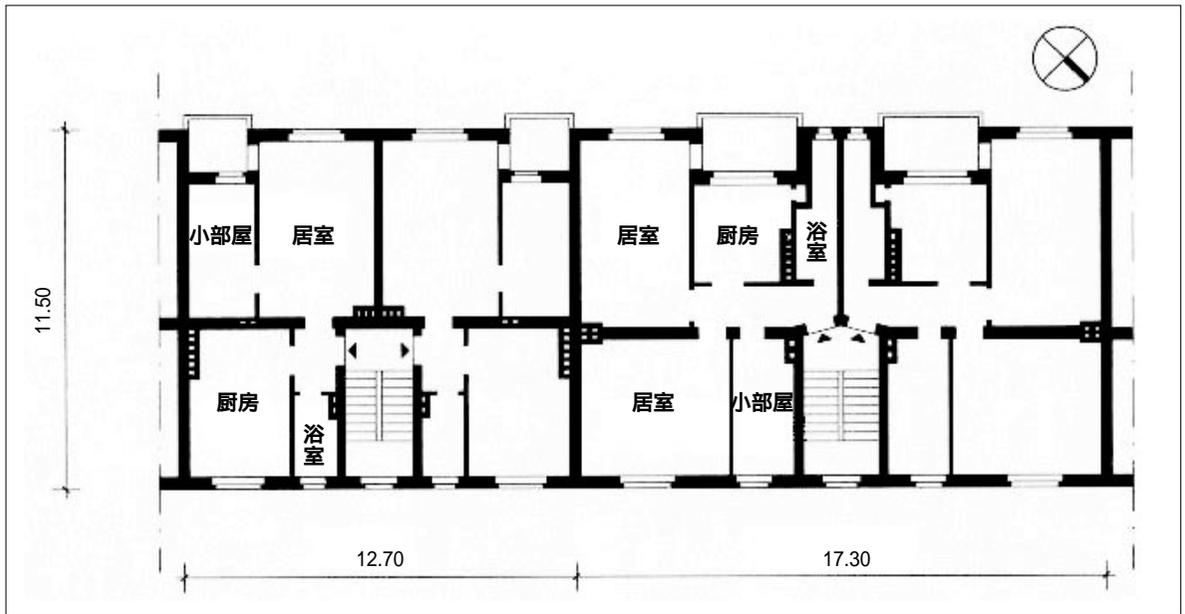


図6 オッサー通りの集合住宅の平面図

3. オッサー通りの集合住宅

この集合住宅は1927～1928年に建設された。オッサー通り Ossastr.)に面して約170mと長く建っており、オッサー通りと直交するヴァイヒゼル通り Weichselstr.)とフルダ通り Fuldastr.)にも面して平面的には“コ”の字の形で建設されている。一部フルダ通りの反対側と、オッサー通りの反対側にも建てられている。住宅の配置図を図5に示す¹⁾。所有はベルリン市とベルリン州の住宅建設公社 (Stadt und Wohnbauten Gesellschaft mbH) で全住居戸数は188戸である。建設者は東ベルリン共同建設会社 (Gemeinnützige Baugesellschaft Berlin-Ost mbH) で、1980年にファサードの改修が行われている。1986～1987年にかけて記念建築物保全の修復が行われた。

ノイ・ケルン地区でも集合住宅は建てられた。この周辺は労働者の為の集合住宅建設地としてベルリン市住宅局が所有していた土地である。単にオッサー通りに面して170mの長い集合住宅を建設したのでは単調になるためにタウトはヴァイヒゼル通り Weichselstr.)とフルダ通り (Fuldastr.)に集合住宅を曲げて建設し、全体にアクセントを付ける工夫をした。住宅はどれも1室半(72㎡)もしくは2室半(98㎡)で、そう広くは無い。住宅の平面図を図6に示す¹⁾。写真12にこの集合住宅のゆるいカーブ

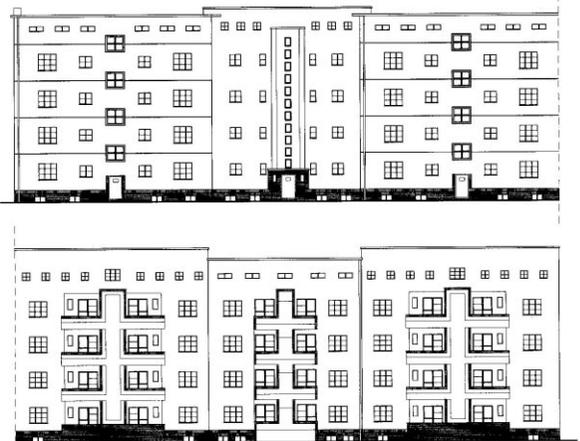


図5 オッサー通りの集合住宅



写真12 オッサー通りの緩いカーブを描く集合住宅外観



写真13 建物の隅角部にバルコニーを設けたオッサー通りの集合住宅



写真14 5階建て、白い外壁のオッサー通り集合住宅



写真15 オッサー通りの集合住宅にはブルーノ・タウトが設計したという銘板がある

を描く白い外壁を示す。このような緩いカーブはオンケル・トムズ・ヒュッテの集合住宅にも見られるし、ブリッツの馬蹄形住宅も同様で、ブルーノ・タウトの得意技であるようである。この集合住宅以外でもあるのだが、建物の隅角部にバルコニーを設置している。これもブルーノ・タウトの得意技である(写真13)。

写真14に5階建ての集合住宅の白い外壁を示す。ドイツように寒地に建つ住宅は凍上防止のために地下室を設ける事が通常である。この集合住宅においても地下室の上部が地上に出ている。この部分は茶色のレンガが使用され、ここに採光と換気を兼ねた窓が設けられている。この集合住宅では地下室は収納庫として使用されている。この集合住宅を調査していると「この集合住宅は1928年に東ベルリン共同建設会社(Gemeinnützige Baugesellschaft Berlin-Ost mbH)により建設され、設計者はブルーノ・タウトである」という事を記した看板が見つかった(写真15)。この集合住宅の中庭側から撮影した写真を写真16に示す。この写真を撮っていると上階のバルコニーから筆者に宛てて声がかかった。「勝手に中庭に入って他人の住宅を写真に撮るな!」とでもお小言を頂くのかと思ったが、そうではなく「あなたはこの住宅に興味があるのか?」との質問であった。「この住宅はタウトの作品で昔



写真16 オッサー通り集合住宅の中庭から撮影

から見たいと思い日本から来ました」と答えると「では住宅内も見たいでしょう、良かったら鍵を開けるから上がっていらっしゃい」との事。若いご夫婦に住宅内の隅から隅まで見せていただいた。ドイツ人はこのような場合住宅の全てを見せると言う、日本人にはとても出来ない面白い性格を持つ。これが正しくかつ親愛を示す接待法なのであろう。食品の収納庫、浴室、トイレまで案内して下さった。整理整頓はドイツ人の得意技であるが、どう見ても食器の数も日本人家庭に比べれば余ほど少なくて済むし、暖房の完備した住宅であれば衣服も少なくてすむことができる。余分な物は保有しないと言う考え方も整理整頓を助けているに違いない。住宅内の案内が済むとブルーノ・タウトが日本でどういうことをしていたかなどいろいろ質問攻めにあった。コーヒーまで入れて頂き、期待していなかった楽しい時間を過ごすことができた。

この住戸の厨房に付けられていた換気窓を写真17に示す。当時は厨房の排気は自然換気によっていたことが分かる。ガラス部分は一重ガラスを二枚使用した構造に



写真17 オッサー通り集合住宅の厨房換気窓



写真18 オッサー通り集合住宅のバルコニー



写真19 オッサー通り集合住宅の内部階段

なっている。この住人が筆者に声を掛けてくれたバルコニーを写真18に示す。恐らくこの若夫婦は春めいてきた天候にこのバルコニーで二人でコーヒーでも入れようと考えていたに違いない。そこに闖入者が現われ、一緒にタウトの話をしながらコーヒーを共にすることになってしまったのである。

写真19にこの住宅内の階段を示す。この階段室においても薄い緑と濃い緑を配色し、どちらかという陰鬱な雰囲気になりそうな階段室に明るさをもたらしている。

おわりに

ノイ・ケルン地区はベルリンのクロイツベルグ地区同様勤労者、労働者が住んだ地区である。タウトはそこに1920年代に先を見越した都市型勤労者住宅を建設した。当時のベルリンは工業化を進めたので、後世になって「黄金の1920年代」と呼ばれる事もあるが、実際には一部の財閥が儲け一般労働者の生活は非常に厳しかった。このような時代のベルリン労働者の生活を好んで描いた画家がハインリッヒ・チレ(Heinrich Zille)である。前号同様にここでも図7に勤労者住宅とそこに暮らす人々の生活を描いたチレの絵を示す³⁾。女の子の服は破れて背中に孔があき、男の子は



図7 第一次世界大戦後のベルリン労働者の生活(ハインリッヒ・チレ)

玩具も買ってもらえず、鼠の死骸を玩具としている。女の子が男の子に「あんたの鼠どうして死んだの?」と聞いている。「オレンち、とても湿気ているんだ!」鼠も死んでしまうほど労働者の住環境は劣悪であった事が伺われる。このような時代に労働者、勤労者の健康を考え集合住宅をがむしゃらに作っていった人がブルーノ・タウトである。

<参考文献>

- 1) Winfried Brenne: Bruno Taut Meister des farbigen Bauens in Berlin: Deutscher werkbund Berlin e.V (Hg.) 2005)
- 2) R. Ahnert, K. H. Krause. Typische Baukonstruktionen von 1860 bis 1960: Verlag Bauweser(2000)
- 3) Herbert Reino. Das neue Zille Buch Fackelträger verlag Schmidt-Kuster GmbH
- 4) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳: 日本タウトの日記: 岩波書店(1975)
- 5) 田中辰明, 袖本 玲: ブルーノ・タウト設計による円形住宅「チーズカバー」: 建築仕上技術: Vol. 34, No. 403(2009 / 2) p. 49-53
- 6) 田中辰明, 平山 禎久, 袖本 玲: ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の作品と建築設備の変遷: 空気調和・衛生会論文集: No. 136(2008) p. 1-5
- 7) 袖本 玲, 平山 禎久, 田中辰明: 41646: ブルーノ・タウトが設計した住宅の暖房設備に関する調査研究: 2008年度日本建築学会学術講演会(2008 / 9) p. 1327-1328
- 8) 田中辰明, 袖本 玲: ユネスコの世界文化遺産に指定されたベルリンのブルーノ・タウト設計による住宅団地: 建築仕上技術: Vol. 34, No. 401(2008 / 12) p. 49-54
- 9) 田中辰明: 建築家マックス・タウトの業績と生涯: 建築仕上技術: Vol. 34, No. 400(2008 / 11) p. 76-81
- 10) ワタリウム美術館編集, Manfred Speidel: ブルーノ・タウト 桂離宮とユートピア建築: オクタブ(2007 / 05)
- 11) 水原徳言: Bruno Taut年表: 群馬県工業試験場(1987 / 6 / 1)
- 12) Annet Menting Max Taut Das Gesamtwerk DVA: Deutsche Verlags-Anstalt GmbH(2003)
- 13) Manfred Speidel: Ich liebe die japanische Kultur: Gebr. Mann Verlag Berlin(2004)
- 14) Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980, Bruno Taut(1880-1938)
- 15) 田中辰明監修: THE 世界遺産「ベルリンの近代集合住宅群」: TBS(2009年5月24日)

謝辞 この調査に同行して頂き、適切なアドバイスを頂いたManfred Bojaschwsky氏に深甚なる謝意を表す。この調査研究を行うに当たり、平成20年度個別研究助成(財団法人日本生命財団)、平成21年度科学研究費補助金(課題番号20700575)、ECO HOUSE株式会社より研究助成金を得た。記して謝意を表す。